

今年の冬は例年になく厳しい寒さでしたが、このところようやく日差しに春らしい暖かさが感じられるようになりました。今日は春一番が吹き荒れていますが、多数のご来賓並びに保護者の皆さまに、卒業式にご参列いただきありがとうございます。

ただいま卒業証書を手にした卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんの門出を心からお祝い致します。

6年前に中学1年生として入学したときには、まだあどけなさが残る少年たちでしたが、今日、卒業生の皆さんを目の前にすると、この6年間ですっかり成長し逞しく立派な青年になったなと感じます。ところで、そのときの入学式で私が話したことを皆さんは覚えているでしょうか。「何のために学校に通うのか考えたことがあるか」と聞いたはずです。そして、その間に対する私の答えは、「自分が何者か」ということを知り「自分がどこへ行くのか」を見つけるためというものでした。

学校で勉強するあらゆる教科の内容が、「自分が何者か」ということを知ることにつながり、自分自身が持っている適性や才能を見つけ育てるきっかけとなったのではないのでしょうか。また、体育祭や開成祭、OP ヨット帆走や遠泳、NZ 研修、研究旅行など様々な行事や体験活動、そしてクラブ活動を通して、「自分がどこへ行くのか」を見つけるヒントが得られたはずです。この中高6年間で、いろいろなことにチャレンジし失敗や成功を繰り返しながら、「自分が何者でどこへ向かって行くのか」ということが、おぼろげながら見えてきたことでしょう。まだまだ皆さんは、この答えをもとめ続けなければいけません。

さて、21世紀はグローバル化の時代だとよく耳にするとおもいます。皆さんが社会にでる頃にはさらにグローバル化が進み、文化や宗教の異なる様々な国の人達と出会い仕事をする機会が増えるでしょう。そのような人達と協力しながら何かを成し遂げたり、ときには競い合ったりすることもあるでしょう。

先日、平昌オリンピックが閉幕となりましたが、日本人選手の活躍は記憶に新しいことと思います。オリンピックを見ているとスポーツや芸術の世界では、とくにグローバル化が進んでいることに気付かされます。そして、大活躍した選手たちの経歴や練習の様子などを知るにつれ、まさしくグローバル時代の生き方そのものであると感じました。

例えば、スピードスケート女子 500m で金メダルに輝いた小平奈緒選手について見てみましょう。

小平選手は 1986 年 5 月 26 日、長野県に生まれ 3 歳でスケートを始めたそうです。伊那西高等学校を経て信州大学教育学部へ進学し、卒業後は長野県松本市の相澤病院に所属しています。2010 年のバンクーバーオリンピックでは、スピードスケート女子 1000m と 1500m で 5 位に入賞、チームパシュートでは、日本女子スピードスケート界史上初となる銀メダルを獲得。2014 年のソチオリンピックでは、500m で 5 位、1000m で 13 位でした。そして、今回の平昌オリンピックでは、500m で金メダル、1000m で銀メダルという輝かしい成績を残しました。今回のオリンピックでこのように素晴らしい成績を残すことができたのはなぜでしょうか。

まず、信州大学に進学したのは、長野オリンピックのスピードスケート男子 500m で優勝した清水宏保選手を育てた結城匡啓コーチの教えを受けるためでした。結城コーチとはその後、オリンピックの頂点を目指して 2 人 3 脚で 10 年以上頑張ってきたことになります。そして、ソチオリンピック後に 2 年間オランダに留学しています。留学する時点で既に一流選手であり 28 歳という年齢でもありました。留学の目的について、スケート技術の向上だけでなく、スケートが好きだからもっと学びたい、オランダに文化として根付いているスケートについて学びたかったからと言っています。この 2 年間でオランダのコーチの助言を受けながら研究を重ね、より速く滑れるフォームを完成させました。またオランダ語も習得し、オランダのメディアとオランダ語でやり取りできるようになっています。そして何かあるたび結城コーチに助けを求めていたが、自立心が育ったとも言っています。この 2 年間の留学が小平選手を大きく飛躍させたのは間違いありません。

金メダルを獲得した競技翌日の記者会見で、小平選手は彼女自身を 3 つの単語で表現すると「求道者、情熱、そして真摯」と答えています。小平選手がしていることを見ても、まさしく 21 世紀の社会で生き抜いていくために必要とされている「問題発見、解決能力」「変化への対応と粘り

強さ」「グローバル化」「異文化理解と多様性への対応」などを身に付け実現していることに気付かされます。まさにグローバル社会のお手本となるような存在です。

小平選手が500mのレース直後に、金メダルを争ったイ・サンファ選手と抱き合っている姿は、オリンピック精神に相応しいものでした。お互いに競い合いながらも国籍や文化の違いを超えた友情と尊敬を感じさせます。このとき、二人は日本語、韓国語と英語で話をしたそうです。ちなみに、小平選手は英語、オランダ語だけでなく中国語でも自己紹介ぐらいはできるそうです。

この記者会見の中で、このようなことも言っています。

「スポーツは言葉のいらぬコミュニケーションだとは思っています。スポーツの究極の姿というものが、たくさんの人々の心を動かすと思うので、他国の選手と競い合って高めあっていくことは大事です。そして、お互いの国の文化を知ったり、お互いの国の言葉を知ることによって、さらにスポーツの楽しさが増し、ほかの国の選手がこのスポーツに対してどういう思いや文化を持っているのかということを知るのには、すごく競技を高める上で必要なかなと思っています。」

ここで言っていることは、「スポーツ」という単語を将来皆さんがするであろう「仕事」に置き換えても十分通用することではないでしょうか。

私が夏休み前の全校集会などで、ときおり自分を成長させる3つのことという話をしましたが覚えていらっしゃいますか。ここでもう一度この話をしたいと思います。

その3つとは「旅」「読書」「良い師との出会い」です。

ここでいう「旅」とは自分が今いる居心地の良い場所から外に出るということを指しています。例えば一人旅や留学などがあてはまります。自分の居場所から外に出ることによって、視野が広がり新しいものの見方ができるようになるでしょう。楽しいことばかりではなく辛いことも多いはずですが、そして、何か問題がおきても基本的に自分で何とかしなければなりません。自分自身の存在や行く末についてじっくり考える時間もたっぷりあります。

次に「読書」ですが、もちろん単純に「読書」によって新しい知識や役に立つ情報を得ることができます。そして「読書」を通じて過去から現在まであらゆる分野の人々と対話をし、思索をすることができます。一生の間に出会うことができる人間の数は限られますが、読書によって偉大な哲学者や科学者とも出会うことができます。

そして「良い師との出会い」です。良い指導者は、自分でも気づいていない資質を見出しそれを

伸ばすヒントを与えてくれます。何もかも教え込もうとせず自分自身で成長、変化できるよう促します。何事も独りよがりでは進歩しません。ときには苦言を呈してくれる存在が必要です。

先ほどお話しした小平選手は、この3つのことを実践し自分を成長させてきたのだと思います。これらのことは誰かから与えられるものではなく、自分自身で求めていくものです。皆さんにも是非今後の生活の中で、この3つのことを心にとめ実践して欲しいと思います。

さて、逗子開成の教育の原点は、校名の由来ともなっている「開物成務」にあります。これは“人間性を開拓・啓発し、人としての務めをなす。”という意味でした。この「開物成務」の精神に基づき、高い目標を掲げ、困難にあっても挫けることなく、自分の未来を切り開いていってください。逗子開成の6年間で学んだことや体験したことは、皆さんのこれからの人生を歩む上で大きな力になると信じています。

最後になりましたが、卒業生の保護者の皆様。本日はご子息のご卒業、本当におめでとうございます。また、今日まで本校の教育活動にご協力、ご理解をいただきありがとうございました。

それでは、268名の卒業生の皆さん一人ひとりの旅立ちを祝うとともに、これからの健闘と活躍を祈り式辞と致します。

卒業おめでとう。